

あぱっさ vol.15

ワウラ語で地球の精霊

HOW TO HELP

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912 FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

＜年会費＞大人：¥5,000 18歳未満：¥3,000
・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体
* 通信欄には「会費」または「寄付」とご明記ください。
・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体
* 銀行からお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

2015年も終わりに近づき、この年に起きた出来事を省みると公私共に大変な一年だったと思います。

当団体にとっても、柴田理事や長い間多大なるご協力を頂いていた支援者の突然の旅立ち等。国内においては、国民主権のはずがそうではなく、ある一部の政治家たちによって厳しい状況に置かれてしまった私たち。いずれその事を否が応でも認識せざるを得ない時が来ると思います。国外では、テロ行為による悲惨な事件が立て続けに起き、憂慮しますが、このような状況になる根底には、さまざまな要因があり、その事柄を解決しなければ終わりにき争いが続き、結果その犠牲になるのは常に、罪なき一般市民であり、弱い立場の人たちで、またそこから憎しみが生まれ、悲しい結末が待っています。アマゾンのインディオ社会も常に厳しい現実があります。シンガー川下流域のペロモンチ水力ダムは完成に近づき、インディオ保護の法案も崩されつつある現在、それでもインディオの人たちは諦めずに、抗議します。そのエネルギーは何処から来るのかと思うくらいです。カヤポ族長老ラオーニも若い頃に親族を目の前で、白人に殺害されたにもかかわらず「白人は嫌いだけど恨まない。恨みは憎しみをつのらせ何の解決にもならない」と語ります。人種、宗教、主義主張の違いを超え、お互いに異質なものを尊重してこそ平和が訪れるのではないのでしょうか。「自然の声に耳を傾けそれに従い人間は生きていかなければいけない」ラオーニの言葉は重く心に響きます。

足る事を知り、自然の法則に従い生きているアマゾンのインディオの営みに、混沌とした私たちの世界が模索している光ある未来の鍵があるのではないかと思います。

来年もシンガー地域支援を地道に続けて参りますので、どうぞご支援、ご協力のほど、宜しくお願いいたします。(南 研子)

今年もご支援いただき、本当にありがとうございました。
スタッフ一同感謝申し上げます。

インシリコ-ヒーライトを是非
一度、お試し頂きたいら
嬉しいですよ



【インディオたちの、今】

下郷 さとみ (フリージャーナリスト)

現地から届いた報告やブラジルの新聞報道、研究報告などをもとに、インディオを取り巻く「今」をお届けします。

シンガーの女性たちの大集会が開かれました

今年10月1日から7日にかけて、シンガー河上流域の女性たちの大集会が開かれ、11民族、計130人の女性が、会場となったワウラ族の村で一堂に会しました。集会では、ゴミや飲酒の問題など、インディオコミュニティが時代とともに直面しつつある問題や、今後懸念される問題について意見を交換。また、それぞれが村から持ち寄った植物・作物の種や手工芸品などの大交換会も開かれました。

集会には、当団体がカミュラ族の村で進める「女性たちの共同畑事業」のメンバーたちも参加しました。同事業リーダーのマプルは「村人の半分は女性。実際は女性が村をささえている。だから私たち女性も表立って意見を言える力を持たなくては」といつも語っています。この集会は、そんな縁の下での力持ちの女性たちが交流し、励ましあい、エンパワメントをはかる機会となりました。当団体からは、同事業メンバーの集会参加にかかる経費を支援しました。



集会で意見を交換する女性たち

(写真: Rosa Galditano)

ラオーニがパリで開催されたCOP21に招待されました

11月30日～12月11日にパリで開かれた「気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)」に、カヤポ族長老のラオーニ、昨年のラオーニ来日に同行した次期若手リーダーのベポーが出席しました。

COPは、二酸化炭素などの地球温暖化ガスの各国の削減目標について話し合う会議です。ブラジルは近年のアマゾン森林伐採量の抑制により、削減目標を上回る成果を達成しています。これは、インディオが森に暮らし続け、彼らの居住権が保障されることによって、アマゾンの森が開発され尽くすことをかろうじて免れているからにほかなりません。

ドイツ国際協力公社の試算によれば、インディオの存在によってアマゾンの森が守られることで、4億3100万トン(2006年～2020年)の温暖化ガスの排出が抑制されました。また、これと同じ働きを植林事業や森林保護対策に費やした場合、年間5億レアル(165億円)の事業経費が必要だとされています。

世界各地で同様に、地球温暖化の防止に大きく貢献する先住民族。このことからCOP21への参加を招待されたラオーニたちは、アマゾン保護への協力を国際社会に向けて訴えました。



潘基文(パン・キムン)国連事務総長と懇談するラオーニ

(写真: Kamikia Kisedje)

インディオの土地への権利をおびやかす憲法改悪案が国会特別委員会で可決

ブラジル全土のインディオが反対運動を続けている「憲法改正案第215号(PEC215)」が10月27日、下院特別委員会において賛成多数で承認されました。

現在、インディオの居住権が保障される土地の境界策定は、法務省の下部組織であるインディオ基礎局(FUNAI)が行い、大統領が署名することで効力を発します。PEC215は、この境界策定の権限を行政府(政府)から立法府(国会)に移す、というものです。ブラジル国会は、巨大アグロビジネスや鉱山開発企業を背景に持つ大土地所有者の議員が多数を占めています。もしPEC21が成立すれば、インディオの居住権の保障は困難をきわめ、開発への歯止めを失いかねません。

PEC215は今後、下院そして上院での投票へと運ばれます。FUNAIは委員会での可決を受けて断固反対の長官公式声明を発表。インディオも全国各地で抗議デモを続けています。



ラオーニとFUNAI長官が共に憲法改悪反対を表明

(写真: Kamikia Kisedje)

ペロモンチ巨大水力発電所がいよいよ稼働開始へ

11月24日、IBAMA(ブラジル環境・再生可能天然資源院)が、シンガー河下流部に建設されたペロモンチ巨大水力発電所の稼働許可を出しました。工事が終了し、伐採され、燃やされた広大な森は、貯水の開始とともにダム湖の下に沈みゆくことになります。

このような巨大開発では、まず計画の段階で「自然・社会環境影響評価(アセスメント)」を実施。アセスメント結果をIBAMAが承認後、工事現場設営、着工、稼働開始の各段階でIBAMAが許可判断を下します。ペロモンチをめぐるアセスメントでは66項目目の不備があったにもかかわらず、「稼働までに解決せよ」という条件付きの承認・許可によって工事が進められてきました。今回、「問題は解決済み」という判断のもとで出された稼働許可ですが、インディオたちは「アマゾンの森とインディオの暮らしを破壊する」として、抗議の声をあげて続けています。

ラオーニは、こう語ります。「ダムはいらない。なぜなら、私たちが命ある存在であるように、河もまた命ある存在として生き続けてほしいからだ。魚たちも、けものたちも、人も、すべての生き物が平和に生き続けられるために、私はダムを拒否する」。足るを知る知恵、持続可能な発展の知恵が求められています。



工事が終了したダム湖貯水・稼働を待つばかりのペロモンチ水力発電所

(写真: GREENPEACE)

南さんとは、18年のお付き合いで、今までに随分多くの生徒達に講演をしてもらいました。また、毎年アマゾンへ旅立られる南さんを生徒たちと空港で見送りをさせてもらっています。

今の教育現場は、アマゾンが危機的状況に瀕しているのと変わらない状況にあると思っています。お金が学力にとって代わり、成果が全て数字で求められ、人作りなど目に見えない心の教育がないがしろにされています。

アマゾンの村では、いじめも自殺もないという話を日本の子ども達にすると驚きます。さらに子どもが大人になるために女子は「孤独」に打ち克つことによって母親になる強さを身につけ、男子にはあえて毒によって生死の境をさまよわせ、そこから生還したものが大人として認められるという儀式の話は「では、日本では何をもって子どもを大人にするのか？」という問いを教師である私に強烈にたたきつけてきました。アマゾンの村の人たちが、ひとりの人間として天命を全うしているのに対し、学校があり「文明」が進んでいる社会に生きている人間がいじめ、引きこもり、さらには自殺をしているという実態はやはり異常事態です。

私は、日本の学校が道を間違え始めたのは「個性」「自主性」を文科省が堂々と言いだした時からだと感じています。今の高校ではほとんどの子が「高校生のままがいい。大人になりたくない。」と言います。カラオケ、行事後の打ち上げなど大人の“見かけの楽しみ”や責任を負わない自由をすべて味わっているからです。以前は「高校生だから」という多くの制約がありました。ただその壁があったからこそ、一日も早く大人になりたいという自立心が芽生えたのです。さらに、今の子どもたちを取り巻く環境は、携帯やスマホの普及によって「信頼」という言葉を抹殺してしまいました。ネットでの書き込みによるいじめは、手加減を知らず、死まで追い込んでしまいます。この類の生徒指導をしていると生徒の顔がカンボジアのキリングフィールドで赤ん坊を振り回して木に叩きつけ、笑いながら殺したという兵隊の顔に見えてきてしまいます。人間はどこまでも残酷に冷酷にそして自己中心的になれるのです。ネットで相手を徹底的に責めながら、教室では笑顔で同情を見せるのです。人を信じることができない環境が出来上がっています。私は、今学校ですべきことは、集団の中で「不自由さ」を他人の痛みを通して教え、その中で自分を自覚させ、南さんがおっしゃっている片手は自分のため、そしてもう一つの手は人のため世の中のために使おうとする人間を育てることだと思います。そのためには、「想像力」を育む教育が不可欠です。相手のこと、自然のこと、そして目に見えないものを見、心で感じる感性の豊かな人間を育てることだと思います。

「信頼」や「責任」という言葉が形骸化している学校社会では到底教育は成り立ちません。まずは未来を作っている教師がちっぽけな意思を持った「考えるアリ」になることではないでしょうか。一教師の闘いは吐息を吐きながら続きます。



左上：榎本先生と来日したラオーニ
その他：シンゲーの子どもたち

心優しく、剛柔持ち合わせた方。修学旅行に東北
震災地を訪れました。ステキです！

11月のある日、私は長年の友人であるRFJ代表の研子さんと世田谷美術館で「生誕100年 写真家・濱谷浩」展（2015/9/19～11/15）を鑑賞しました。

そこにはたった50年前というのに、とてつもなく今の日本の生活とかけ離れた雪国の暮らしや、まるで映画を見るようなレトロチックな銀座の街角の様子がありました。本当に少しの間にこんなに日本は変わってきてしまった…。

今や高級住宅地といわれるわが町だって、60年前は山羊を飼っている人が近所にいて、一升瓶を抱えてミルクを買いに行ったものです。研子さんも小さい時、母親が玄関口に來た男の子に握り飯を渡したのを覚えているそうです。確かにその子たちは裸足であったと。

人の心も同じようにその頃ととても変わってきているように感じる人が多いと思うのはわたしだけでしょうか。

東北の被災地では未だ仮設暮らしの方が多いのに、オリンピック競技場のために「国はたった2500億円も出せないのかね。」と言い放った元首相がいます。福島では黒い袋が増える一方なのに、「福島イズアンダーコントロール」と言い切った日本の現首相、廃棄物の処理場もないのに原発再稼働の決定、そしてついには安保法案の強行採決。

国民の頂点にいる人がこのような国民のこころとかけ離れた言動をしていることに行き場のない思いが募るばかりです。

濱谷展に展示されていた濱谷浩の言葉「人類史上最大の犠牲と不幸を代償として日本は惨敗した（中略）日本は絶対に戦争に近づいてはならぬ」が心に突き刺さりました。

目先のことを考えるのではなく、これからのことをいつも心に置きながら日々を過ごしたいと思います。アマゾンの民のように。そして思うだけでなく、できる範囲で気持ちを表す「行動」をしていきたいです。

RFJ設立当初からの協力者。苦言を呈してくれるあつ子さん
とても大切な存在です。

「事務局のお手伝いを始めました！」

岡田 直子

研子さんの存在を知ったのは、以前勤めていた出版社「ほんの木」をとおして『アマゾン、インディオからの伝言』に出逢ったことがきっかけでした。“すごい人がある！”と感激、興奮した当時から13年。いつ頃からか研子さんには個人的にもお世話になり、さまざまな局面で大切なアドバイスを頂き、今では人生の大先輩であり第二の親のような、とても大きなありがたい存在です。

この度、産後で小休止していたところに声をかけて頂き、少しずつですが事務局のお手伝いをさせて頂いています。それにあたり、改めてアマゾンの森に思いを馳せたとき、13年前との意識の変化に気づきました。当初、初めてアマゾンの現状を知ったときは、「早く何とかしなければ！」と焦燥感ばかりがありました。しかし、今は焦るよりも「豊かな森をイメージして、とにかく今できることをやろう」と腰を据えて、現実と向き合うことが出来ています。現地の状況はむしろ以前よりも厳しく、決して楽観視できないのは事実です。でも、まだ来ぬ未来について先回りして憂い悩むよりも、まずは今あるものに感謝し、今できることをしよう、と思います。当たり前のことかもしれませんが、私は、実はこの当たり前の感覚こそが森やインディオの人々の暮らしを守ることにつながるように思うのです。焦りや不安から行動しても、結局は負のものしか生み出さない、と。

研子さんがよく話されるように、ダム建設に抗議するために各部族が集結した日にも「今日は亀祭りだから」ときちんとお祭りをする部族がいる。先行き不透明なインディオの人々の暮らしの中でも「今日のお芋は美味しい！」と大喜びする女性たちがいる。このように良い意味で刹那的に生きる感覚を忘れ、“計画的”で“効率的”な考え方を追求していった延長線上に、森林伐採、ひいては原発や戦争がある…と考えるのは行き過ぎでしょうか。

未来や過去を憂い悩むのではなく、今を生きること。頭で分析・判断するのではなく、体や直感で感じること。不安や義務感ではなく、閃きや喜びから行動すること。これらは実は、私が研子さんから学んだことでもあり、子どもの存在のおかげでようやく会得しつつあることでもあります。

悲しい出来事が絶えない昨今だからこそ、恐れや悲しみに呑み込まれず、明るい未来に意識を合わせ、この後者に軸足を置いて生きていきたい。その意識でアマゾンのお手伝いをさせて頂きたいと思っています。

抱えきれないほどの体験を通いたくましく人生を歩んで
いる、たのしく、美しい人です。